



[評者]

志水 太郎

獨協医科大学総合診療医学
主任教授/獨協医科大学病
院総合診療科診療部長

誤診の解体

診断エラーに潜む認知バイアス
(The Cognitive Autopsy: A Root Cause
Analysis of Medical Decision Making)

Pat Croskerry 著

宮田 靖志, 中川 紘明 監訳

●B5変 頁344 2021年12月
定価: 4,950円 (本体4,500円+税10%)
[ISBN978-4-8157-3038-3] MEDSi 刊



近年の国際的な数々の提言のなかでも、「診断の改善」は近年世界の医療全体が取り組むべき課題として5指に入るほど重要であると言えるでしょう。実際、日々の現場で起こる“誤診”や“診断の遅れ”から発生する患者、家族、医療スタッフ、厚生経済への負担を考えると、これは理解できることだと思います。

原書が発表された2020年、本書が出版された2021年は診断学業界にとって象徴的な年でした。2020年までの10年間は医師の診断思考(頭の中)にフォーカスが当てられ、どのような経緯で診断のエラーが起こり、それをどのように認知心理学を中心とした方法で解決していくべきか、ということが多く議論されました。さらに2020年には状況性 situativity という言葉も登場し、医師の頭の中だけでなく、それに有機的につながる環境やセッティング、人的要因などのすべてを包含して診断の改善に立ち向かわなければならないというスローガンも提唱されました。2021年になり、診断改善の先陣を切る学術誌『Diagnosis』や、『JAMA』をはじめとした主要紙は、この領域の目指すものを診断の卓越“diagnostic excellence”という新しいキーワードで、次のステージに歩を進めている状況です。この10年で当領域のアイコンとなったキーワードは「診断エラー」であり、人間の認知や意思決定に影

響を及ぼす「認知バイアス」でした。

本書の大部分は40を超える診断エラー症例から構成されます。各症例で認知エラーがどのように起こったかを分析(認知的解剖と呼ばれる)し、その分析をどのように「明日に活かす」か、についての振り返りと考察がされています。本書は単に症例集としても勉強になりますが、M&Mとはまた違う角度からの科学的分析を通した振り返りは、診断の質を向上させていくうえで他では代替できない大きなドライブとなると思います。

後半では、著者が所属されるカナダのダルハウジー大学で推進された診断エラーの取り組みを交えた今後の提言、そしてそれに続く章では著者による症例全体のバイアスの俯瞰と分析、そして初學者フレンドリーな認知バイアスのまとめが用語集的に収載されています。

著者のクロスケリー先生は物静かで温和な先生で、推薦文を書かれているグレーバー先生らとともに、この診断エラー領域を10年以上牽引してこられた方です。本書は宮田靖志先生、中川紘明先生という本邦を代表する診断学領域の先生方の明快な監訳のもと、診断エラーの俯瞰を学びたい方の貴重な第一歩となる1冊であると思います。